



## 徳川時代の教育(一)

# 武士の教育は人格教育

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



江戸時代の初期は米が生活と経済の中心でしたが、貨幣経済が発達し、米以外の商品の生産消費が経済の中心になると、米に収入源を頼った武士は、相対的に貧乏になることは避けられませんでした。

経済力は低いけれど教育水準が高く、特殊な道徳観念に従う武士階級が社会の上部構造を作り、その下に洗練された経済社会、市民社会がある、という江戸時代の社会構造はユニークです。この構造が利益追求だけがルールではない世界を作り、多くの武士たちは「君子は義に論り、小人は利に論る」という論語の言葉に殉じてゆきました。

このような武士の性格を形作ったのが、武士の教育システムでした。武士にとっての必須は文武両道で、文は儒教、特に宋の時代に完

成された朱子学に基づいて学ばれました。三代家光から五代綱吉の時代にかけて、幕府は「武断政治」から「文治政治」に舵を切り、武士階級は三民(農・工・商)の師表として立つことを求めました。

幕府は元禄三年(一六九〇)、林羅山の私塾を江戸城北の相生橋に移転して湯島聖堂と昌平黌(昌平坂学問所)を建設し、幕府直轄の学問所として各地の藩校から英才を受け入れました。また、駿府の明新館など天領にも学校を建てました。学問の開始は五歳から七歳。論語素読から入つて、大学・論語・中庸と四書五經の学問を進める一方、剣術・槍術・馬術・水練・鉄砲などの武術を必須科目とし、これは各藩の藩校とも共通していました。武士たちの教育の基本は人格

教育でした。のちの人生で必要となる知識は、必要になったときに必死で勉強すれば得ることが出来る。しかし立派な人格をつくる教育は、幼い内から徹底的に教えなければ血肉とならない、と考えたからです。

会津藩の場合、藩校に入る前の子供たちは、毎朝「仕の教え」を唱えました。「年長者の言うことをきかねばなりません」「年長者にはお辞儀をしなければなりません」「虚言を言つてはなりません」「卑怯な振舞をしてはなりません」「弱いものをいじめてはなりません」「戸外で物を食べてはなりません」「戸外で婦人と言葉を交わしてはなりません」「ならぬことは、ならぬものです」。幕末に到るまで最も武士らしいと名の高かった会津武士の根底にあったものは、この精神でした。

府中(静岡)学問所。江戸城の無血開城後、駿府に移封された徳川家は、府中藩の人材を養成するため、駿府城に府中学問所を開設。昌平坂学問所などの教授が教えたが、1872年に廃校。

